

Evolang は、言語の起源と進化に関心のある研究者が集う学会である。研究者の出身分野は文化人類学・霊長類学・言語学・生物心理学など多岐に渡る。もともと私は言語進化に興味を持ち、比較生物学の観点から何か示唆が得られないかと考えて小鳥の歌を研究対象として選んだ経緯があるため、この学会をとっても楽しみにしていた。

今年の開催地はポーランドである。私が今までに行ったことがある外国はアメリカとインド、それぞれ一度ずつだ。飛行機に乗るといっただけでも私にとってはいまだに一大事業である。道中一人でないのがせめて救いだ。案の定、成田空港でチェックインを済ませた後、保安検査があるということを失念していて、同行者から連絡がなければ飛行機に乗り遅れるところだった。

言語進化について何を研究するかというと、まず挙げられるのは言語の「前駆体」を探す試みだろう。ある者は音楽に、別の者はヒト以外の生き物のコミュニケーションにそれを見いだそうとする。またヘッケル（「個体発生は系統発生を繰り返す」）に倣ってか、子どもの言語発達から言語の萌芽の手がかりを得ようとする者もいる。あるいは手話と音声言語の共通部分から、言語の核となる認知能力とは何かを問う試みもある。

私が多く聴講したのはシミュレーション研究であった。これは化学物質の生成に例えるとイメージしやすいかもしれない。言語という不思議な構造物、規則性にあふれる一方で例外がいたるところで顔を出すこの捉えがたいものが、生成する条件とは何か。過去をそのまま再現することはできなくても、パラメータ（エージェントの数、ネットワークの疎密など）を色々と変更しシミュレーションを走らせることはできる。恐ろしく単純化されているからこそ、予測を得るには有用だ。そうした予測の妥当性が、実験によって検討されることもある。人工言語を被験者に記憶させ、彼らがそれを別の被験者へ伝達していくうちに、最初に与えた人工言語がどのような構造を獲得あるいは喪失していくかを観察するのである。

印象に残ったのは、“linguistic accommodation” にまつわるシミュレーションである。“linguistic accommodation” とは、ある言語により精通した話し手がそうでない話し手に対し、理解を促すためにあえて単純な文を発することを指す。大人が子どもにする語りかけや、外国語話者に対する発話などがこれに該当することがある。製造・医療の現場で外国人労働者の受け入れが進行する日本で、彼らや彼らの子どもたちは日々どんな日本語を耳にしているだろうか。シミュレーションは1対1の状況で、より熟達した話し手がそうでない話し手の「言語モデル」を想定する。話し手間の相互作用のたびに「言語モデル」は更新される。今後、1対1ではなく多数のエージェントが相互作用するシミュレーションや、実験室実験を行う計画だという。言語の起源からは少し脱線してしまうが、グローバリゼーションが進む世界における言語の将来を垣間見る

研究だった。